

「実践 ホスピタル・プレイ」

静岡県立病院機構理事長、県立総合病院院長
神原 啓文

静岡県立短期大学の著者等が5年前に英国より紹介・導入したホスピタル・プレイ・スペシャリスト (HPS) の養成コースに、本院や静岡県立こども病院の職員が参加し、現場で実践してくれていることから HPS に関わることになりました。小児科におけるその必要性は私自身も日頃より実感していますので、今回の出版に当たり書評を書かせて頂くことにしました。

HPS とは、病児や障害児とその家族を対象に、入院前から退院までのあらゆるプロセスにおいて、子どもの感じる苦痛やストレス、不安などを遊び (play) の力を用いて軽減し、医療との関わりを肯定化できるように支援する専門職です。子どもにとって、遊びは最も身近な存在であり、遊びの質が生活の豊かさに結び付くと言っても過言ではありません。しかし、欧米諸国と比べても日本は遊びに対する理解がまだ十分には得られておらず、小児医療の中でも「ホスピタル・プレイ」という言葉は遠い存在でした。

本書では、日本で初となる HPS 養成教育を展開する静岡県立大学短期大学の取組と、HPS を取り巻く現状が紹介されています。とりわけ、HPS 養成講座における英国講師と受講生の対話形式による講義内容やプレイ・プログラムなど実際の医療現場において活用された遊びの実践例が収録されており、これらを通じて病児や障害児に対する専門的な遊び支援について理解を深めることができるようになっています。

また、本書の付録には東日本復興支援として実施された「HPS スマイル・プロジェクト」の様子が掲載されており、過酷な環境の中であっても子どもが



編著者 松平 千佳

共 著 フランシス・バーバラ、江原勝幸、森 裕樹

A 5判・230頁／創碧社 2012年2月発行

定 価 2,100円

夢中で遊ぶ姿を見ると、改めて遊びの力と価値を再認識させられました。

病院という非日常の生活空間にあっても、子どもが本来の豊かさの中で治療や入院生活を乗り越えるために、子どもと遊びをメディアとして繋ぐ HPS が小児医療チームの一員として医療現場に浸透していくことを期待します。